
4人の罪

深々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

4人の罪

【Nコード】

N7194U

【作者名】

深々

【あらすじ】

4人の転生者がチート能力を貰ってネギまの世界に行く話です。基本、ノリで書き始めたので矛盾ありありで複雑なんてほとんどありません。作者のなかではネギまⅡなんでもあり、の方程式が成り立ってます。

それでもよければどうぞ。

プロローグ1 一人目

プロローグ 一人目

（ここは・・・何処だ？）

周りを見渡そうとする。

（・・・なにもない？）

なにかがあるのか、それとも何もないのか判別することができない。

自分の外部を認識することができないようだ。

（俺は・・・死んだのか？）

自分は死んだのだろうか。

さっきまで記憶が曖昧だ。

いや、記憶自体が曖昧だ。
名前さえ今は思い出せない。

<人間よ>

（誰だ？）

突如声が聞こえた。

いや、聞こえたという表現はおかしいのかもしれない。
聞こえたように感じた、というのがより適切な表現だろう。

<自分が死んだことは認識できるか？>

（ああ）

声に応える。

応えたような感じがする。

<お前は自分の罪がわかっているか？>

（・・・ああ）

俺の罪。

それほど重いのだろうか。

自分の犯した罪だけはハッキリと認識できる。

俺は、両親を殺して、妹に殺された。

俺は罪を犯したのだろうか。

この声が、俺の罪を尋ねているのだから、きっとそれは罪なのだろう。

<お前には別の人生を歩んでもらう？>

（？・・・転生か？）

<簡単に言っなればそうだ>

よく二次創作などであるあの転生だろうか。

<5つ、5つだけ能力を与える>

(・・・これは俺への罰なのか?)

<そうだ>

(あんたは、誰だ?)

ふと今になって思う。

この声はなんなのだと。

<人は神と呼ぶ>

(神か・・・)

<そうだ。それよりも早く能力を言え>

(ああ・・・わかった)

この神の言う事に疑いようがないと、無意識のうちに思う。
思わされているといった方が正しいのかもしれないが。

(じゃあ、『銃姫』の魔銃士の等級1の強さ。銃の扱い方とか魔力の使い方とかという意味で)

(闇の精霊王としての力)

（超再生能力）

（圧倒的な精神力）

（それと、ありとあらゆる努力と才能を上回る才能）

<最後の最後でありえんくらいのチートがきたな>

<見た目とメイン武器は別に与えよう。言え>

（見た目は・・・D O G Sの直刀、男で頼む。武器は銀の弾丸を無限精製できる二丁拳銃で）

<わかった。そして最後に>

神はそう言う、少しの間、間を開けてから言った。

<お前は罪を償わなければならない。その方法は・・・『銃姫』を手に入れ、『神』を消す>

その瞬間、俺の意識は途切れた。

プロローグ2 二人目

プロローグ 二人目

(・・・ん?)

ふと違和感を感じて周りを見渡す。

(ここは?・・・ここは何処だ?)

さっきまでPCの前に座っていたはず。

(いや、違うな・・・僕は・・・!?)

そう、自分は自殺したのだ。

周りの環境に耐え切れずに。

自分のことを見下す人々。

確かに見た目は少し悪かったかもしれない。

しかし、そんなの僕をイジめる理由になんてならないはずだろう。

母親は僕を見ると逃げ出し、父親は僕を見ると殴る。

妹なんて僕と会うことさえない。

何故、何故こんなにも理不尽なことをされなければいけなかった

のか。

<気がついたか？>

（誰だ！？）

<人間は神と呼ぶ>

（神・・・？）

もしかして、もしかして僕にも運が回ってきたのかもしれない。

（テンプレ！？チート転生させてくれんの！？）

<ああ>

（マジ！？）

<一つ条件がある>

（条件？）

<罪を償うことだ>

（罪？僕の罪？）

何かしたのだろうか。

いや、していないはずだ。

学校で僕をイジめる同級生の個人情報流そうとはしたが、結局

していない。

男の僕には力で勝てないと思ったから、僕をバカにする女を犯そうと思ったが、怖くてしてない。

他にも両親を殺してやろうとは思ったが、後々困るのでしてない。

何もしていないはずだ。

むしろ僕は被害者じゃないのか？

<お前の罪は、自殺したことだ>

（え？どういうことだよ！僕の、僕のせいじゃないだろ！周りのやつらのせいだろ！）

<関係ない。命はお前のものではないのだ>

（なんだと！？僕の命は僕だけのものだ！）

<・・・能力は5つまで。見た目とメイン武器は別に与えよう>

（話を変えるなよ！）

<早く言え>

神の威圧に思わず押し黙る。

皆して僕をバカにしゃがって。

（何処に転生されるんだ？）

<ネギま>

簡潔すぎる答えが返ってくる。

（じゃあ、F a t eのゲートオブバビロンと、ラカン以上の気とコノ力以上の魔力）

（それと異常な身体能力と車輪眼）

<見た目と武器は？>

（見た目は・・・ギルガメッシュで、武器は・・・）

<ちなみにゲートオブバビロンには武器は入っていない。あれはただの入れ物だ>

（マジかよ！？じゃあ、武器は剣をたくさんくれ）

<わかった>

<最後にお前の罪を償う方法を教える>

その言葉に再び怒りが沸く。

何故自分が罪を被ることになったのか。

本来償うべきは自分ではないはずだろう。

<自殺をすることを禁ずる>

（・・・え？それだけ？）

<ああ、それだけだ。ではいけ>

そこで僕の意識は途絶えた。

プロローグ3 三人目

プロローグ 三人目

（ここは一体何処？）

いつも違う感覚に違和感を感じる。

自分の体がない。

（もしかして天国？）

もう一度回りを見渡す。

よくわからない。

（思ってたより何もない・・・）

でも、

（ここにいるのね・・・秋音）

自分の親友の名を呼ぶ。

自分の分身と言ってもいい人間だ。

私にとって彼女は自分で、きっと彼女にとっても私は彼女。

あなたに会いに来たのよ、とそう言いたかった。

彼女がいなくなつて2ヶ月。

やっとこつちにこれた。

あなたに会いたい。
今すぐ会いたい。

（何処にいるの？出てきて・・・）

<それは無理だ>

（誰！？）

私と秋音の邪魔をするの？
また邪魔をするの？

彼女のためだったら、私はなんだって出来る。

彼女が望めば体売った。
彼女が望めば万引きをした。
彼女が望めばイジめに加担した。

なんだってできる。
彼女のためなら。

<お前は死んだ。お前には罪がある。わかるか？>

（罪？私に？）

<そうだ>

私の罪・・・ああ、そうだ。
一つだけあった。

彼女を死なせてしまったことだ。

いや、もう一つあった。

ここに来るのが遅れてしまったこと。
すぐ来ると言ったのに。

<それは、自殺したことだ>

(え？それは罪なの？)

<ああ、罪だ。お前はそれを償わなくてはならない>

(罪を償う・・・？別になんでもいいけど、早く秋音に会わせてよ)

<彼女はもう存在しない>

(え・・・？どういうこと！？なんで！？なんで秋音が居ない何て言うの！？秋音はちゃんというわ！)

彼女だけが、彼女だけが私を理解してくれる。
私を救ってくれた。

彼女が、私の全て。

<ネギまの世界で罪を償え。能力を5つだけ与えよう>

（勝手に話を進めないでよ！秋音に！秋音に会わせて！）

< 言え >

世界が震える。

その瞬間、私は彼女に会えないことを理解し、罪を償わなければいけないことを理解した。

（っ・・・罪をどうやって償うの？）

< ネギまの世界で、英雄を殺せ >

（え、英雄を殺すの？・・・私の罪って何なの？）

< 自殺したことだ >

（どうして英雄を殺さなければならないの？）

< 英雄とは、大量の人間を殺した者だ。これ以上罪を重ねる前に償わせなければならない >

（私は罪があるとは言え、人である英雄を殺しても構わないの？）

< 構わん。そちらの世界で罪を重ねることは出来ん >

（どういうこと？意味がわからないわ）

< それより早く能力を言え >

（・・・『エア・ギア』の全ての技を使えるようにして。それと『フェアリーテイル』のラクサスの能力）

（それから、コノカ以上の魔力に最高峰の治療師としての能力と解析能力）

<見た目と武器はどうする>

（見た目はガゼルで、武器はもちろん壊れない全ての道に適したエアトレック）

<わかった、ではいけ>

そして私の意識はなくなった。

プロローグ 4 四人目

プロローグ 4 人目

(・・・ここは)

周りを見渡すが、何かなんだかわからない。

(私は・・・死んだのね)

まさかこんなことになるなんて夢にも思っていなかった。

優しかった幼馴染。

何よりも頼りにしていた親友。

両方に裏切られた。

二人はお似合いのカップルだった。

私は、それを見ているだけでよかった。

幼馴染に強姦された。

彼の友達と一緒に。

あれほど男の人が怖いと思ったことはなかった。

憎んだ。

だから、殺してやった。

彼が悪いのだから。

なのに、親友は理解してくれなかった。

結局親友は、彼氏に裏切られたことを信じず、私を殺した。

二人で揉みあって崖に落ちたから二人とも死んだと思う。

未だに、この胸の中の憤りは消えない。
世界に裏切られた、そんな気分だった。

<人よ>

(!?)

ビクリと体を揺らして驚く。

そこで気付く、体がない。
意識だけのようだ。

<お前の罪は理解しているか？>

(・・・二人を殺したこと?)

<理由はなんであれお前は二つの命を奪った。お前もまた罪を償わねばならない>

(なるほど・・・何をすればいいの?)

<ネギまの世界へ行き、英雄となれ>

（英雄・・・？わかったわ）

<能力を5つやろう。見た目と武器は別にだ>

（えらく気前がイイのね・・・能力は、コノカ以上の魔力とかってアリ？）

<構わん>

（じゃ、コノカ以上の魔力にすべての魔法を使えること）

（それと・・・魔道具を自由に生成できることと、刀の扱いが超人レベルになること）

（最後に・・・人の嘘がわかる力が欲しい）

裏切られたくない。

そんなことになるのなら、今度はこつちから殺してやろう。

<見た目と武器はどうする？>

（見た目は、学園黙示録HDDの毒島冴子で瞳の色を紫に、武器は最高級の魔法媒体となる折れない刀で）

なんだか、どこぞのテンプレね。

（そういえば、他に私みたいな人はいるの？）

<何億という>

（そ、そうなんだ・・・）

<お前と同じ世界に送られるのはお前を含めて合計4人だ>

（4人・・・その人たちの情報は？）

<一人目は男、二人目も男、三人目は女、四人目はお前だ>

（能力とかは？）

<それはまだ向こうも決まっていないので教えられん>

（じゃあ・・・前世というか罪は？）

<一人目は親殺し、二人目は自殺、三人目過去に何人かころして自殺、お前は親友と幼馴染を殺した>

（なるほどね・・・三人の罪を償う方法で私と被る子いる？）

<一人・・・3人目が『英雄』をおろさなければいけない者がいる>

（え？うそ本当に！？）

ヤバいかもしれない。

ネギまということでかなり応用性のある魔道具と全ての魔法を頼んだ。

しかし、これでは若干心もとない。

刀は使えるようにはなるが、やはり何か足りない。

<そろそろいけ>

(え?ちよつと!)

その瞬間、私の意識は途絶えた。

1話 空ノ丘凜鱗花（そらのおかりんか）・1

空ノ丘凜鱗花・1
そらのおかりんか

私がこの世界に新たに生れ落ちてから5年が経った。

案外5年というのはすぐだった。

最近ふと思うことがある。

前世での私は本当に幸せだったのか。

この世界で始めて両親の愛に触れて思った。

私は今、今幸せだ。

愛されていると感じる。

あの頃を思い出し、秋音を思い出し苦しむ私を両親は救ってくれた。

私は誰かに依存することでしか存在意義を見出せない欠陥品。

どこか壊れているのかもしれないが、そのことに気付いたことは大きな一歩だと思う。

秋音が私のことを利用していたかもしれないということは、心のどこかで思っていたことだった。

でも、それを認めたくない、それでも構わないと思う私がいた。

だから私は秋音に依存した。

でも彼女は今はもういない。
今いるのは愛する両親だけ。

だから私は両親のために力を振るう。

幸い私の両親は、母親が元『正義の魔法使い』で父親が元『格闘家』だ。

二人とも若いのに現役を引退して、普通の仕事についている。

父親は昔傭兵をしていたらしい。

私が貰った力には『エア・ギア』のトリック全てというのがあるが、どうにもそれは今の私には使いこなせない。

体が持たないのだ。

一度この体の見た目と同じ、ガゼルの牙を撃ってみたのだが、足の骨が折れた。

それはもう簡単にポキッといってしまった。

あのための両親の慌て様は大変なものだった。
ひどく叱られたが、同時にすごく愛されているなと感じた。

私は強くなってみせる。

『英雄』を殺すために。
罪をちゃんと償いたい。

「凜鱗花。準備はいいか？」

「うん」

「いくぞ・・・」

最近では父親と簡単に実践形式の訓練をしている。

5歳にはまだ早いのだが、私の熱意が伝わったのか、それともこ都合主義なのかはわからないが両親は承諾してくれた。

「ふっ！」

音を置き去りに拳が・・・

「ってマジかよ！」

どこぞの会長バリのパンチだった。

それと最近何故だか口調が自然と悪くなってきた。
この見た目の影響かもしれない。

「くらいなあ！」

本来の牙から3段階も4段階も威力の落ちた牙を放つ。

「はっ！」

牙が消されました。

一瞬で。

てか父親の声による振動でかき消された。

「・・・このウンコクスが！」

「そんな汚い言葉を教えた覚えはないぞ！」

反射的に右に避ける。

その瞬間自分のいた場所が決れる。

（ありえねえ・・・これが漫画の世界ってやつか）

「凜鱗花！集中しろ！」

「っ！」

父親との訓練では主に避けることがメインだ。

体も鍛えはしているが、本当に申し訳程度だ。

母親には魔法の面で訓練をつけてもらっている。

神からの能力のおかげで、回復形の魔法はピカイチだ。

攻撃魔法は雷がかなり得意だ。

これはラクサスの能力の影響だろう。

魔力もかなり多いらしい。

そのせいか人前では魔力を抑えるように言われている。

雷事態も、多分やろうと思えば出せるし、食べれると思う。
ただそれをやって両親に心配されたくないから今はやらない。

今使うのは基本はエアトリックだけだ。

魔力に関してはかなり才能があるのだが、気に関してはサッパリなんじゃないかと最近思う。

父親はどうも気の扱いに長けているのだが、私が気について聞くとどこか悲しそうな顔をする。

最初は何か嫌な思い出でもあるのかと思ったが、どうも違っらしかった。

前に酔った父親が母親に愚痴っているのを見た。

魔力はピカイチだからお前は教えがいがある。

しかし、自分が伝えられるのは技だけだ、と。

別に私自身当時、気に才能がないことに落ち込みはしたが、そこまで深く思っていない。

父親が落ち込んでいたことに関して少し申し訳ないと思ったが。

牙を主に撃つようになってから、気があつたらよかったなと思わないこともない。

いや、正直結構思う。

牙はすごく体に負担が掛かるのだ。

雷や風、水や火に石の道を使うのは、魔法染みているせいで母親に不振に思われるかもしれないので出来ない。

残るは茨や角や牙や轟になるのだが、どれもこれも体に負担がかかる。

この体に一番シクリくるのは茨と牙なのだが、牙を最初に出してしまった以上、茨を今使うのは流石に出来すぎるというものだろう。

とにかく今の私の目標は英雄を殺すだけの力をつけることだ。

筋力：E

魔力：A

知力：D

耐久：E

幸運：B

敏捷：C

筋力〓物理攻撃力 魔力〓MP最大値 知力〓魔法攻撃力 耐久〓
物理防御力 幸運〓クリティカル率 敏捷〓回避力

スキル

・アクティブ

3段階劣化・牙 C

雷の魔弾の射手1矢 D

治療 D

解析 A

・パッシブ

雷耐性 A

2話 山神（やまがみ）・ S（スパイダ）・ 真哉（しんや）・ 1

やまがみ
山神・
スパイダ
S・真哉・1
しんや

僕がこの世界に生まれてから5年が経った。

僕はアメリカ人の父親と日本人の母親の間に生まれたハーフだった。

イケメンなのだ。

もちろんギルガメッシュの見た目を望んだこともあるけど、なんていうかイケメンなのだ。

自分は平均よりちよい上かな？なんて思っているような人間にはこの気持ちは絶対にわからないだろう。
イケメンなのだ。

これだけで世界が変わる。
もう全然違う。

まだ子供だから？
将来型崩れすることが大半の子供の顔に期待するか？

いや、そんなのするわけないだろう。
今は可愛くてもブツサイクになる可能性は十分にある。

実際前世の僕がそうだったのだから。

（にしてもネギまか・・・）

これはハーレムを作れというフラグなのだろうか。

自分よりも圧倒的に精神年齢の低い女の子にさえ、オドオドしてしまう自分がある。

このままではハーレムのハの字も語れまい。

なんとかしてイケメンの顔に似合う性格にならねばならない。

最近どうも両親の反応が冷たい気がしなくもないが、自分で金を稼げるようになったら両親なんて必要ない。

両親なんていつ僕を捨てるかわからないんだ。

今は優しい顔をしていても後でどんな扱いになるかはわからない。

僕はちゃんとそのことを前世で学んだんだ。

とりあえず今はこの力を使いこなすようにしよう。

生憎僕の両親は一般人だった。

そのため魔法を教えてもらうことはできない。

クソの役にも立たない両親だ。

こんなのなら僕の方から捨てることになりそうだ。

「ふおおおー！」

夜中にチートな身体能力で家を抜け出し、今は原作で忍者が修行していた森で訓練中だ。

ゲートオブバビロンから思ったとおりの剣を思ったところに打ち出す。

案外これは難しい。

剣が空中から出てくるところがイマイチ想像できないのだ。

仮に出来ても自分の肩の位置だけだ。

原作のギルガメッシュみたいにいっぱい出すことは出来ない。

案外難しいものだ。

師匠とかがいればもっと楽にレベルアップできるのかもしれない。

エヴァンジュリンに師事したいが、それでは僕の方が彼女よりも下の立場になってしまう。

それだけは嫌だ。

今の僕はギルガメッシュだ。

誰かの上に立つ人間なんだ。

「うおおりゃあ！」

気合を込めて剣を射出する。

ちなみにまだ天地乖離す開闢の星を出すことはできない。
宝具で出せるのは多分ランク的にD程度だと思う。

まだまだだ。

もっと強くなってみせる。

自分が満足いく生活をしたい。

あの頃のような屈辱はもうゴメンだ。

今度は剣を一つ出してからそれを振るう。

剣術も出来なければ話にならない。

元々チートな身体能力と車輪眼があるので、戦いでは困らないかもしれないが、それでは格好がつかない。

剣道と同じ形で面を繰り返す。

きつとこうやっていれば強くなれるはずだ。

剣の熟練度が上がったら今度は刀を使おう。

前世でもネットゲームのような根気の要るものに関しては十分に才能があつたと思う。

同じことをひたすら繰り返すことにはなれている。

ガマンすることにも。

熟練度が上がればそのうち新たに技が使えるようになるだろう。

ひたすらに一心不乱に剣を振り続ける。

「・・・お？」

なんだか明るくなってきた。

チートな身体能力のおかげで疲れることはほとんどない。

そのため今から家に全力で帰って、普通に寝ていたフリも可能だ。
睡眠をあまりとる必要がないからだ。

この体には感謝してもしきれない。

どうやら僕の望んだ『異常な身体能力』というのは、筋力と俊敏、そして回復力に優れているようだった。

「ふふふ・・・」

これで僕は最強になる。

「僕金髪が朝日に照らされて綺麗に輝いていた・・・と、いったところか？」

ふふふ、と笑いながら家までダッシュで帰る。

筋力：B

魔力：A

知力：E

耐久：B

幸運：D

敏捷：B

スキル

・アクティブ

ゲートオブバビロン D

剣術 F

・パッ
シブ

車輪眼 B

異常な身体能力 A

F 才能なし

3話 海条直刀（かいじょうなあと）・1

かいじょうなあと
海条直刀・1

俺がこの世界に生を受けてから約5年の月日が流れた。

俺は多分一般人とは大分違う人生を歩んでいるだろう。

俺の両親は共に『正義の魔法使い』だ。
それもかなり狂信的な。

幼い頃、というか生まれたその瞬間からいかに『正義の魔法使い』
が素晴らしいかを教え込まれた。

別にその『正義』に対して文句はない。
誰にだって自分の『正義』がある。

そのためならなんだってするのだろう。

俺だってそうだった。
前世で俺はちゃんと自分の『正義』を持っていたと思う。

その結果が両親の殺害と妹に殺されるという結末だったただけだ。

『正義』のためなら何をしても構わない。
その通りだと思う。

人の世界は他人によって変化されていいものではない。
俺の世界は俺の世界だ。

誰にも干渉させない。

『正義』を他人に押し付ける。

その行為自体がその人の『正義』なのだろう。

否定なんてしない。

むしろ肯定しよう。

その代わり、俺の『正義』も押し付けさせてもらう。

5歳の誕生日の日に俺は両親に言った。

「お父さん、お母さん」

「どうしたんだい？直刀」

「あのね・・・」

「うんうん」

両親はニコニコとして俺を見る。

それもそうだろう。

俺は魔法使いとしても戦士としても優秀で才能があるからだ。
もちろんこれは俺の本来の才能でも努力でもない。

神から貰った『あらゆる才能と努力を上回る才能』のおかげだ。

それを知らない場合においては才能は発揮されない。

例えば、俺が魔法を知る前、俺の魔力は平均以下だったらしい。しかし、親が見せた瞬間、その魔力は原作で言うなればコノカ以上の量になった。

チートだろう。

それと言わずしてなんといおうか。

「僕ね・・・『正義の魔法使い』になるためにね色んな人を助けたんだ」

「直刀・・・」

「まあ！」

両親は俺の言葉に感動しながらこちらを見る。
それもそうだろう。

『正義の魔法使いになりたいんだ』

これを言えばなんでも出来る。

俺の『正義』のためにあんならの『正義』を利用させて貰う。

「心配しなくてもあなたは将来立派な『正義の魔法使い』になれるわ！」

「でもね・・・前ニュースでね紛争地域ではいっぱい人が死んでるって言ってた」

「それは・・・」

両親はなんとなく俺の言いたいことが分かったのだろう。
少し言葉を濁らせる。

「僕はね！そこに行つて色んな人を助けたいんだ！」

5歳の子供が紛争地域に？

狂気の沙汰としか思えない言葉だろう。

でも両親は『正義の魔法使い』だ。

「直刀・・・あなたにはまだそれは早いわ」

「お母さん！僕はね、二人みたいな立派な魔法使いになりたいんだ
！」

頑固で我侭なことは子供のみに許された特権だろう。

「でも、危ないのよ」

「・・・行かせてやろうじゃないか」

「あなた！」

流石お父さん。

原作に出てくる、がんぐろふえ・・・名前は忘れたがそれと意気
投合するだけある。

「お父さんありがとう！僕、立派な魔法使いになってくるよ！」

「ふっ、そうか。流石は俺の息子だな。手配は全て俺がやっておい
てやる」

バカな親だ。

もし俺が普通の子供だったら確実に死ぬか、自信喪失して魔法使
いとして終わる。

普通でないからこうして、そんなところに行きたいなんて言うの
だけだ。

「・・・仕方ないわね」

ふふふっと笑う母親。

そうして俺は、両親の狂信っぷりのおかげで紛争地域に行くこと
が出来るようになった。

（まずは情報だな。『銃姫』の）

俺は自分のしたことを罪だとは思っていない。

でも、そのことに関してなんらかの償いをしなければならないと
感じる。

神のせいなのだろうか。

俺は狂信的なまでとはいかないが、『銃姫』を求めている。

今の俺の『正義』は『銃姫』で『神』を消すこと。

前世での俺の『正義』とはずいぶん違ってしまっているが、今の俺の『正義』はこれだ。

俺はこれを買き通して見せる。

そのためなら両親でも友人でも、『妹』でも利用しよう。

「直美、お兄ちゃんはちょっと人助けをしてくるよ」

「え・・・直美も行く！直美もお兄ちゃんと一緒に行く！」

「ダメだよ」

「なんで!？」

「まだ僕は直美を守るほど強くないんだ。直美を守りたいんだよ、僕はお兄ちゃんだからね」

「でも・・・」

「直美はお姫様だから、ここで待ってて。強くなって直美を守るから」

「・・・うん！直美待ってるね！」

妹、その存在を見るだけで虫唾が走る。

俺を殺したのは。。。じゃない。

『妹』だ。

この存在が、俺は許せない。

「じゃあ行ってくるね」

その日から一週間後俺は海外へ旅立った。

筋力：S

魔力：S

知力：S

耐久：S

幸運：S

敏捷：S

スキル

・アクティブ

銃 S

魔力制御 S

ガン⇨カタ S

治療 S

剣術 S

・パッシブ

闇の精霊王 D

精神力 S

超再生 S

『あらゆる才能と努力を上回る才能』⇨すべての才能を上回る才能を持ち、全ての努力の結果を既に上回る才能を持つ。その者が死んでも劣化することはない。

闇の精霊王の力は世界にそれを使用するものがないので低い。

4話 ハイエル・O（オルタ）・T（テレジス）・デイジー・1

ハイエル・O・T・デイジー・1
オルタ テレジス

結局、自分以外の転生者を見つけれぬまま5年が過ぎた。

いや経ってしまった、と言った方が正しい。

5歳の自分が外をうるちよろしすぎるわけにも行かない。
それゆえに探しに行くことができなかったのだ。

この小さな体がこんなにももどかしいと思うとは。

このまま、英雄を殺さなければいけない転生者を見つけられなければ、私は英雄に安易になることはできない。

41

私は英雄にならなければいけないのだ。

不運なことに私の両親はどちらも一般人だ。

このままでは私は強くなれない。

神のおかげで、魔力も魔法のバリエーションも豊富だ。

魔法を習えば、かなりのレベルまでいけるのはもう目に見えている。

しかし、それはちゃんと習えれば、の話なのだ。

今の私にはそれができない。

いきなりエヴァンジュリンのところへ土下座にしてくることに、ど

れほど矛盾があるか。

彼女に教えてもらうための対価も今持っていない。

私は刀が扱える。

おそらく、というより絶対に達人級でだ。

しかし、それにおいても刀があつた場合だ。

私の手元に刀はない。

ましてや一般人が手に入れることができるとは思えない。

魔道具の生成も何故かまだできない。

私の予想だが魔道具の実物を見ていないせいか、どのようなものかわからないためではないかと思う。

（欠陥ありまくりじゃない！どうしろつてのよ！）

もう、詰んだ、としか言い様がない。

人の嘘を見抜く能力も、基本的に幼稚園の友達が嘘ついたのを見破ることしか出来ない。

つまり、今の私は圧倒的に無力。

多分皆は、

英雄になれない＝殺される心配もない。

だから別にいいと思うかもしれない。

でも、何故か分からないが私は英雄にならなければいけないのだ。
英雄に早くなりたい。

早く罪を償いたい。

そんな時、私は幼稚園で原作キャラに出会った。
そこで私はふと気付いたのだ。

私は勝ち組みではないのかと。

Q 英雄になると言えば？

A ネギ。

Q ネギと一緒に行くには？

A 仮契約。

Q 仮契約するには？

A 2 - Aに入る。

Q 2 - Aに入るには？

A 特技が必要。

Q 私は？

A チート。

(キタアアアア)

適当に今のうちから仲良くなって、魔法世界編後らへんで英雄に！

(ヤバイ、私天才かもしれない)

そこで私はふと思う。

（仮契約ってキスだけ？）

前世ではあのレイプを除いても、全て経験済みだ。

しかし、こちらではまだだ。

というか、精神年齢が25歳離れている子供に欲情できようか？
いやできまい、反語。

（ということは仮契約がファーストキス？）

あのネギがファーストキス。

（やっぱやめよっかな・・・英雄なるよりも乙女の純情の方が私は
大事だと思います）

色々とショックで立ち直れなさそうだ。

「はあ」

ため息をつく。

「なんで私こんな変な世界に生まれちゃったんだろう」

そう言わずにはいられないだろう？

「お前・・・それ本当に思ってるのか？」

「え？」

（今のを聞かれた？私変人決定？）

「この世界が変だっと思ってゐるのか？」

「え・・・あ、うん」

（ちうたんじゃねえかあ！お姉さんテンション上がったちゃうよ！）

「だよなあ！やっぱここ変だよなあ！」

「そ、そうだね」

おそらく長谷川さんだと思われる少女に勢いよく肩を揺さぶられる。

（そういえばそんな感じの悩みを抱えてたな、この子）

今の私には、「魔法がある」なんて言えない。

仮に言ったとして、彼女に証明する手立ても、彼女を守る力もない。

「お、落ち着いて、ね？ね？」

なんとか彼女を落ち着かせる。

話を聞く限り、そうとう抱え込んでいたようだ。
泣きながら話されると、ウルツときてしまう。

（実際にこういうのを見ると、原作キャラに対する気持ちも変わる

な)

彼女の話に相槌を打ちながら私は彼女を慰める。

「あ、ありがとな・・・」

真っ赤になりながら長谷川さんは私に言う。

「千雨な、私の名前。あんたは？」

「私はハイエル・D・デイジー。デイジーって呼んで」

「ん、わかった」

なんとなく二人で公園のベンチに座る。

懐かしい気分だ。

そう、まるで、まるで親友みたいに。

「・・・っ!？」

「どうした？」

「なんでもないよ」

?を頭の上に掲げる千雨にニコリと微笑んで私は空を見上げる。

(親友・・・また裏切られるかもしれない)

そんな思考が頭をよぎった。

そこでふと思った。

（神から武器もらってんじゃん私）

筋力：E

魔力：A

知力：C

耐久：E

幸運：C

敏捷：D

スキル

・アクティブ

剣術 A

・パッシブ

嘘を見抜く S

5話 直刀・2

直刀・2

仕方がないな。

「ふふふ・・・ハハハハ！」

敵陣のど真ん中に飛び込んで敵を片っ端から殺していく。

ガンッカタを完全に習得しているため、多対一で銃を使っている問題はない。

「クツハ！散れえ！はじけ飛べえ！」

最近ちよつと戦闘狂地味してきたかもしれない。
てかもうなってるかもしれない。

—— パァン！

左の銃の引き金を引く。

『アグー
闇』

単純にそれだけの詠唱。

まだ声変わりしていない子供特有の高い声でその呪文が弾丸から
発せられる。

その途端、あたりを包むのは闇。

「な、なんだあ!?!」

「目が見えない! 敵は!?! 敵は何処だ!」

―― パァン!

右の銃の引き金を引く。

「ハッハッハッハ!」

敵の頭が弾けとんだのがなんとなくわかる。

「ど、どうしたんだ!?!」

「かかってこい! この程度じゃ足りない!」

どんどん殺していく。

一人目から数えて20分ほどして敵を20人を全滅させた。

「流石だな」

「ん? そつか?」

マナが声を掛けてくる。

まさかこっちにきて原作キャラに会うのは予想外だった。

よく考えればありえる話なのだが、それに気付かなかったあの時の自分が憎らしい。

出来れば原作には関わりたいと思う。

俺には『銃姫』を探す使命がある。

そのためには仲間が必要だ。

仲間というよりは情報だが。

しかし、原作キャラは基本ネギ中心だから、俺の手足として動くことが出来ない可能性がある。

「ふふつ。『銃姫』様様だよ」

「その名で呼ぶなって」

皮肉なことだ。

『銃姫』を探している俺の二つ名が『銃姫』。

男である俺が『銃姫』。

たぶんこれは声変わりをまだしてないことからだろう。

建前上『正義の魔法使い』を目指している俺が、『正義の魔法使い』から忌み嫌われる二つ名もちの傭兵。

「しかし、その歳で二つ名があるとは流石だな」

俺がマナと出会ったとき、マナはパートナーを失った直後だったらしく、色々荒れていた。

その時の俺はそれが原作のマナだとは気付かなかった。

だから不用意にも彼女に近づき、信頼を得て利用するために彼女を立ち直らせた。

途中から名前を聞いて、あれ？とは思ったことは思ったのだ。

しかしだ。

普通はありえるだろうか？

この世界に一体何人の傭兵がいるというのだ。

一瞬の間に何人の人間が死んでいるというのだ。

そのうちの一人に当たる確立なんてかなり低いに違いない。

幸運が高いのは、原作に幸運がMAXの人間がいるからそれ以上の運を俺が持っているのはわかる。
でもこれは運がいいのだろうか。

むしろ逆なのではないかと思うのだが。

「まあ・・・そういうこともあるさ」

俺とマナは近くにある荒れた町へと向かう。

町に着くと俺は目深に被っていたフードをはずす。
そして、マナもコートに隠している長い髪を出し、顔の半分を覆っている仮面のように見えるスコープをはずす。

こんな戦場で、さっきの人物と俺達を区別する者なんていないだ

ろっ。

俺とマナはそのまま町の中央まで行く。

そして中央に集まっている人が人の元へと寄る。

その近くには父親の知り合いであろう『正義の魔法使い』がいる。

俺には今二つの二つ名がある。

一つはさっきも言われた『銃姫』。

この時はフードを深く被り、無意識だが戦闘狂になる。

魔法も、簡単な一語だけのものを使っている。

そして、今こうやって治療している間は『東洋の天使』と呼ばれている。

なんだかバカにされているような名前だがそこは気にしない。

俺には名前を売る必要があった。

何よりも早く『正義の魔法使い』としてのし上がる必要がある。

闇の精霊王としての能力が素人レベルしか使えないのはきつと、この世界には漫画の『銃姫』関連は全くないのだろう。

となると、情報を集めるのは至難の業だ。

特に俺のような子供にそんな情報が回ってくるわけがない。

だから俺には、『正義の魔法使い』サイドと傭兵サイドの両方からの『銃姫』へのアプローチが必要なのだ。

『銃姫』の力は強大だ。

それこそ神の力だ。

だからこそ、その力を得た上層部はそれを必死に隠そうとするだろう。

そんなことは目に見えている。

しかし、その時に上層部が手に入れたことすら知りませんでした、では話にならないのだ。

俺は『神』を消す必要がある。

その過程に『銃姫』を使うことももちろん必須だ。

そのためには早く、より早く上層部に食い込む必要がある。

『銃姫』の情報が何よりも早く俺に回ってくるために。

そして、傭兵としては普通に情報を求めるためだ。

ある程度なら非合法のやり方で情報を集められるだろう。

その時にナメられて偽の情報を掴まされないためにも傭兵としても名を売らなければいけない。

一刻も早く『銃姫』をこの手に。

「はい。どうですか？足は動きますか？」

例の才能のおかげで手に入れた語学能力で、この町の子供に話しかける。

「動く・・・動くよ！」

喜んで飛び上がる子供。

全然疲れてはいないが、汗を拭うふりをする。

「大丈夫かい、直刀？」

マナがこちらを心配してくれている、フリをしている。

マナは知っている。

俺の魔力が膨大であることを。

隠す前に魔眼でなんとなく感じ取られてしまった。

それ以来は、マナには俺の護衛としてこうやって手伝って貰っている。

「直刀君、無理はしないでくれよ？君が倒れたら元も子もない」

「あ、はい・・・じゃあ少し休ませて貰います」

さきほど足を治した子供の親に連れられ、割とこの地域ではマシな部類に入る部屋で休む。

マナがあくまで護衛なのでドアの横に立つ。

まだだ。

もっと、もっと強く。

6話 凜鱗花・2

凜鱗花・2

（ああ、くそ！敵多すぎだろ！）

だいたい50人近くいる。

そのうち半分が魔法使いだ。

「この腐れ豚野郎があ！」

牙を放つ。

完成された牙を一つ。

それだけで10人が一気に舞う。

その蹴りの遠心力を使用して体を回し、もう一つ牙を放つ。

2人程度が吹き飛ぶ。

「「魔弾の射手11矢」」

真つ赤な火を纏った11本の矢が飛んでくる。

「もっと綺麗な数で打ってこいやあ！」

最近使えるようになった牙の壁を放つ。

合計33本の矢の8割がたを落として、さらに敵に当たる牙。

その壁を通り抜けてきた矢は避ける。

6、7本程度なら避けることも今の私なら可能だ。

「雷の暴風！」

「待つてましたあ！いただき！」

雷の暴風をそのまま食らう。

「な、なんだと！？」

「はっは！今度はこっちからいくぜ！」

使えるが使えばその後3日間は起き上がれなくなる茨を使う。

骨と骨の間に窒素を入れるなんて狂気染みているが、その分茨は強力だ。

何より柔軟性がヤバイ。

牙は撃つ瞬間動けないかつ、今の私は最高で4本しか打てないため原作のファルコみたいなことはできない。

だから一撃に重きを置く戦い方しかできない。

しかし茨は一撃は軽いが範囲が立体的で広い。
そのうえ回避もしやすくなる。

そしてなによりガゼルに最も合っている。

茨のレガリアに一瞬で変換する。

そして残っているうちの半分に一気に茨を放つ。

「誰かあいつを落とせえ！」

敵さんのうちの一人が叫ぶ。

「くっそ！ただの餓鬼じゃないのかよ！」

「ハハッ！」

ただの餓鬼がエアトレックを履いてるわけなのに。

「もしかしてあいつ！あれじゃねえのか！」

一人が気付いたようだ。

「『始まりの翼』だ！」

ちよこちよこそう言ってきたかいたったというものだ。
私は英雄を殺す力を身に着けることを約束された女だ。

ガゼル、『始まりの翼』。

両親のためにも私は負けられない。
きつと罪を償ってみせる。

「くらいな！ウンコクス共！」

茨を残りの奴らに放つ。

全員を茨で捕まえる。

「う、動けねえ！」

「くたばりやばれ！」

そのまま茨のまま牙を放つ。

そして当たる瞬間に茨を引く。

本来牙を撃つ用にできていない茨で撃つたことによる威力の低下を、茨で引っ張ることによって補う。

「ぐあああ！」

「はっ！どんなもんだ！」

この5年で口調の悪さが悪化した気がしなくもないが、そこは気にしないことにした。

両親もこのことで私を捨てたりなんてしないから。

私はこの日魔法世界でテロリストを殲滅していた。

父親にそろそろ本物の実践がいろいろと言われたのは今から3年前。

今私は一人で戦っていたが、実際はランクA一人とBが二人、私の後ろにいる。

父親のツテで私が戦闘で危なくなった時のために呼んだのだ。

3年前からこのメンバーは変わっていない。

3人とも綺麗な女性で、私のお姉さんといったところだ。

その3人はチームで割りと名が売れているらしく、それがついて
いる私も自然と知られる。

その上私はまだ当時8歳だった。

割と私の口調は敵さんの印象に残るらしく、自分で『始まりの翼』
と名乗っていたら割と名が売れた。

まあ、テロリスト限定だが。

「お疲れ様、凜鱗花」

「あいつら大したことねえな。本当にタマついてんのか？」

「こらっ！そんな汚い言葉使わないの」

何故だろうか、自分でも努力はしているのだが。
思考をする時は普通の口調なのだ。

それがいざ口に出すと、どこで変換されるのかは知らないがこう
なってしまう。

「あう、悪い」

「ほらっ！」

パシ、パシと頭を叩かれる。

「アキサ、頭叩きすぎ。りんちゃんバカになっちゃったよ？」

「でもねイナル、こうでもしないとこの子の口調治らないよ?」

失礼なことだ。

私はきつとやれば出来る子なのだ。

「んなことねえよ。きつと治る」

「治ってないよ」

後ろから声が聞こえて振り返る。

「ウル姉、報告は終わったのか?」

「うん」

とこか、ゼロ使のタバサを連想させるような雰囲気がある。

「ウルからも何か言っておいてよ。もう3年よ?3年」

私がこうやって魔法世界にくるのは大型の休日だけだ。

しかし、それでも年に6、7回はこういった実践をしている。

そう考えると年の5分の1近くはこの4人で過ごしているのだ。

「・・・それも個性」

「わかってんじゃねえか!」

なんだか、凜鱗人ではなくただの酔っ払いの親父みたいな口調に

なってきたかもしれない。

「はぁ・・・」

「大丈夫だつて、アキサ」

横でアキ姉が落ち込んでいるが、それはあえて気にしないことにした。

「それにしてもりんちゃんのその特性？は便利ね」

イル姉が言っている私の特性というのは、ラクサスの能力のことだ。

「確かにね。イナルの雷、全く効かないものねえ」

もはや雷限定でチートだ。

「なのに何故か雷の魔法、覚えが悪いのよねえ」

そうなのだ。

というか、フェアリーテイルではドラゴンスレイヤーは詠唱していないのだ。

していてもウェンディの支援魔法くらいだろう。

そのせいだがしらないが、私は詠唱がある魔法が苦手なのだ。というより詠唱なしの魔法なんてないから、言つなれば魔法が苦手なのだ。

「別にいいだろ、こつやつて戦えるんだし」

「はぁ・・・気も使えないしね」

それを言われると凹む。

本当凹む。

「なんで気が使えないんだ・・・」

全く使えないわけではない。

でもそれを戦闘に使えるかと言われれば無理。

纏うことはできるが、精精障子が和紙になる程度。

いや、もう差がわかんねえ、ってレベルなのだ。

私は強くならなくちゃいけないのに。

「ま、とりあえず今日もその足技を鍛えていきましょうか」

「おう！」

そう今の私にはこれしかないのだ。

「はい、でしょー！」

「ぐはっ」

そう叩かないで欲しい。

7話 デイジー・2

デイジー・2

私が千雨と出会ってから5年の月日がさらに流れた。

刀の方は大分慣れた、と思う。

当時の私は結構パニくっていたのかもしれない。

親に剣道場に通いたいと言えば、二つ返事で了承してくれた。

マリーアントワネットの「パンがなければお菓子を食べればいいじゃない」ではないが、言うなれば、

真剣がなければ竹刀を使えばいいじゃない。
といった感じだ。

まさにその通り。

結構な期間剣道を習ってきたと思う。

そこでふと振り返ってみると、この剣道は正直危ない。

ここ麻帆良学園では普通なのかもしれないが、この剣道は間違いなく人を殺せる。

(・・・まあ一般人相手ならね。一撃で)

しかし魔法関係はあいかわらずサッパリだ。

この5年でいくつか変わった点がある。

まず一つ目。

原作キャラとあれからも色々出会った。

エヴァンジュリンとも出会った。

そう4年前に。

それから時間が経って、彼女が中学にすることがおかしいと感じる時期に私は何も感じなかった。

むしろそれが普通だとおもった。

後にそれが認識阻害の効果だと改めて実感した。

二つ目に高畑さんと出会った。

多分、魔力の高さから私に目をつけたのだろう。

これはいいのか悪いのか分からない。

結局ネギと仮契約する、という考えは英雄になる道の一つとして考えている。

そして三つ目。

これが最も重要だ。

なんと、私の他の転生者を見つけたのだ。

まだ一人しか見つけていないが、見る人がみればわかるだろう。

なんとって見た目がギルガメッシュなんだ。

千雨を遠くから見ていることがたまにある。

ハーレムを目指して話しかけに来るのかと思いきや、ある程度近づくと逃げていくのだ。

（この根性なしがあー！！）

おっと。

最近どうも男に対して厳しくなってきたような気がする。
ついでに理想の男性像も大分高くなってきた。

この見た目のせいだろうか。

そのうえ刀を持つとなんだか落ち着くのだ。
そう、ああこれこそ自分だ、と思うのだ。

その様子を千雨に見られて、お前もついに、なんて言われた時にはちょっと涙した。

それにしても後の二人が見つからない。

ギルガメッシュが分かり安すぎたってのもあるかもしれない。

今更ながら思うが、この見た目は結構ミスったのではないかと思う。

学園黙示録H.O.T.Dはアニメ化もして、それなりに皆知っているだろう。

となると、そのメインキャラである毒島冴子の顔は見るものが見ればわかってしまう。

どうせなら普通に可愛い顔にすればよかったと今更ながら後悔。

もしかしたら、他の転生者はすでに私をみつけているかもしれない。
い。

その人はすでに私の罪の償い方を知っているかもしれない。

その人が英雄を殺さなければならぬ人かもしれない。

もしそうなのだとしたら、

（やめよう。ネガティブになるのはよくないな）

私の剣術も相当なチートだが、相手も転生者であるならチートであるのは確かだろう。

なんとって好きな能力5つなんだから。

早く魔法を習いたい。

そう。

私は全ての魔法が使える。

（・・・あれ？）

つまりは知らない魔法は使えないということなのだろうか。
適正はすべてにある。

が、それが高いとは限らない。

（・・・うおおい！！あの時の私！何やってんのよ！）

「おい、デイジー」

聞きなれた親友の声にハッと顔を上げる。

「ち、千雨」

「また暴走してたぞ」

「・・・」

そう最近私はたまに暴走するのだ。

私自身としては普通に考え事をしているだけなのだが、回りからみるとそうは見えないらしい。

だんだんと考え事がヒートアップしてくると、私は頭を抱えて唸っているらしい。

それだけならまだありえるのだが、どうも、

「また回してた？」

「ああ」

頭を振り回す癖があるらしい。

考えてもみてほしい。

毒島冴子似の激クービュートイー系の人間がベンチに座って、唸りながら頭を抱えて頭を振り回している様子を。

なんと不気味なことか。

「ま・・・デイジーだしな」

「え！？何その結論！それで納得しちゃうの！？」

「え・・・？今更」

おっと、お姉さんは今ので大分傷ついちゃったぞ。

「ま、そんなことより早く行こうぜ」

そう、今日は友達の家に行くのだ。

「千雨ちゃんの二人目の友達だもんね。そりゃ楽しみで仕方ないよね」

さっきからどこかソワソワした感じが否めない千雨をからかう。

「なっ！？そ、そんなことねえよ！」

「あらあら、そんな真っ赤な顔をされると興奮してしまうじゃないか」

ふふふといいながら千雨の顔をへと手を伸ばす。

「さっさと行くぞ、変態」

すると突然真顔に戻って私を無視し始める千雨。

「ちょ、ちょっとお」

（なんていうか、最近イジられてる？）

毒島冴子がイジられる。

（キャラが！キャラが崩壊してしまう！私のキャラが！）

「早く来い！」

（うう）

結構必死である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7194u/>

4人の罪

2011年10月6日16時33分発行